opusdei.org

## イエスのみ心

「イエスから学ばなければ、 本当に愛することは決してで きないでしょう」。聖ホセマ リアによるイエスのみ心の祝 日の説教(1966年6月17 日)。

## 2023/06/14

父である神は尽きることのない愛™と慈悲と愛情の宝を、御子の聖心を通して私たちにお与えになりました。神が私たちの祈りを待って聞き入れるだけでなく、願う前に願いをかなえてくださること、つまり、神

が私たちを愛してくださっていることを確かめたいと思うなら、聖パウロの教えを知るだけで十分でしょう。「その御子をさえ惜しまず死に渡された方は、御子と一緒にすべてのものをわたしたちに賜らないはずがありましょうか」図。

受肉(託身)に始まり、救い主としてのこの世でのご生活、イエス・キ

リストの十字架におけるこの上ない 犠牲に至るまで、神の愛の顕れで す。ところが、十字架上では、その 神の愛が新たなしるしをもってれてのです。「兵士の一人が槍でれれたのです。「兵士の一人が槍で、 エスのわき腹を刺した。するとエス の水とが流れ出た」「5」。イエス の水と血、それは愛ゆえにする 成し遂げるでは、最後の最後まで 身を挺した主の献身を物語っていま す。

時には、人間の邪悪に満ちた態度に 心を痛め、不愉快を味わわれて人とれたこ人をありますが、イエスは態度を もありますが、り、尊でした。 といませんで見るといませんで見るとがより たりかりませんで見るといるの立腹や怒りは変す。 とがすぐにわかります。 とがすぐにわからが理解であることが理解であることがであることがであることがです。

十字架上で、人々を愛するがゆえに 刺し貫かれた聖心をもつイエスこ そ、物事や人間の価値を雄弁に物 語っており、もはや言葉を必要とし ません。人間、そしてその命と幸せ には、神の御子が人々を救い、清 め、高めるため自らをお与えになる ほどの値打ちがあるのです。傷つい た聖心を眺めて、ある祈りの人が言 いました。「これほど傷ついた聖心 を誰が愛さずにいられようか。愛に 愛をもって応えない人があるだろう か。これほど清らかな聖心を抱擁し ない者があるだろうか。生身のわた したちは、愛には愛を報いる傷つい た御方を、不信仰者たちが御手と御 足、脇腹とみ心に手を差し入れたそ の方を抱きしめるのである。我々の 心を愛の絆で結び、槍で傷つけてく ださるようお願いしよう。我々の心 はいまだに頑なで強情であるから |

謙遜になる努力を怠ると人は神を自分のものにしようとします。します。しまりとします。あるしまりになったが、「これは、ある」であるであるです。とうによってではなったとがではなったがはなっていまったがはなっていまりではなっていまりでするではなっていまりです。これではなっていまりでするのです。これではなっていまりではなっていまりでするのです。これではなっていまりではなっていまりです。これではなっていまりではなっていまりではなっていまりではなっています。

れは信仰から生まれる知性でも、事 物を玩味して愛することのできる正 しい知性でもありません。かえっ て、人間の能力を超えた真理を卑小 にし、人間の心を覆ってしまい、聖 霊の霊感に対して無感覚にさせる考 え方、いつもの惨めな経験に合わせ てすべてを判断しようという無茶な 考え方なのです。神の慈しみ深い力 によって、哀れな人間が持つ貧困を 打ち破ってもらわない限り、人間の 貧弱な知性は何の役にも立ちませ ん。 |新しい心を与え、お前たちの 中に新しい霊を置く。わたしはお前 たちの体から石の心を取り除き、肉 の心を与えるしい。そして、聖霊の 約束を前にして、魂は光を取り戻し 喜びに溢れます。

「わたしは、あなたたちのために立てた計画をよく心に留めている、と主は言われる。それは平和の計画であって、災いの計画ではない。将来と希望を与えるものである」[13]と、

神は預言者エレミヤの口を借りて告 げておられます。典礼においてこの 言葉はイエスに当てはめられます。 神がこのように愛してくださってい ることは、イエスにおいて、はっき りと示されたからです。主は、人間 の不甲斐なさや卑小さを処罰するた め、あるいは問責するためにおいで になったのではなく、私たちを救う ため、赦すため、平和と喜びを与え るためにおいでになったのです。主 とその子どもである私たちとの間の このように素晴らしい関係を認める ことができれば、当然私たちの心も 変わり、彫りと深さと光に溢れた全 く新たな展望が目前に展開すること でしよう。

## キリストの愛を伝える

しかし、神は、心の代わりに純粋な 意志をやろうとは言っておられない ことに注目してください。心をくだ さいます。キリストになさったよう に心をくださるのです。私は、神を 愛する心と人々を愛する心というでまる心を持っているわけでる の異なる心を持っているわけでる のません。両親や友人を愛ません。 で、キリストと御父、聖霊、も しで、子を愛するのです。 ではないと思います。 はではないとはない、 はできない、 とのでするのになること はできない、 とのになること はできない、 とのでするのになること

人間愛、この世での愛が本当の愛を あれば、神の愛をもつなら、に対して 立ちます。真のでするというでででででででででででです。 がするにおいてはいうでででででででででできるです。 下国の間相互のではいるではいるでではいるというであるというであるといるであるというであるというであるというであるという。 対しまることではないではないではないではないではないではないではないではないではいるというではいるというではいるではいるではいるではいるではいるではいるではいるというではいるというではいるといるというではいるというではいる。 受けたものを与え、学んだことを教 えなければなりません。思い上がら ず、謙遜な心で、キリストの愛を 人々にも伝えなければならないので す。社会において、仕事や職業にい そしむにあたり、仕事や職業を奉仕 の営みに変えることができます。ま たそうする義務があるのです。訓練 と技術の進歩を取り入れて完成させ た仕事は、それ自体が一つの進歩で あり、他の仕事の進歩にも役立つこ とでしょうが、それだけではなく、 そのような仕事は重要な役割を果た し、人類全体に大きく貢献すること ができるのです。ただし、利己主義 に陥らない寛大な心と、自己の利益 ではなく、公益を求める心、つま り、キリスト教的な考え方に基づい て働かなければなりません。

人間関係の織りなす日常生活において、仕事を続けるにあたり、キリストの愛と、キリストの愛の具体的な表れである理解と愛情、平和を示さ

なければなりません。キリストがあ まねくパレスチナ地方を巡って「善 を行われたしいいように、私たちも、 家庭や社会、日常の仕事や勉学、休 息など人間の辿る道において、〈平 和の種蒔き〉作業を繰り広げていか なければなりません。それができる 時こそ心に神の国が訪れたと言える のです。「わたしたちは、自分が死 から命へと移ったことを知っていま す。兄弟を愛しているからです。愛 することのない者は、死にとどまっ たままですしばると聖ヨハネが書く通 りです。

しかし、イエスの聖心という学校で学ばない限り、誰一人として今述さたまったますることはできません。キリストの聖心を熟視し黙想することによってこそ、私たちの出ることによってごそ、私たちの出り、できるから憎悪と無関心が姿を消し、他者においましみを見て、信者にいじてきることができるからです。

イエスは哀れにお思いになっ。 福音史家が書き記しように、 でまましています。傍のでいます。 ではまさに、のでいたでもかるにとどれたでもでいるは、 でもなって、 でもいるではあましたがでものでは、 では、 でいるではいるでは、 でいるでは、 でいることができる。 ように死を克服なさったのです。しかしその前に、そして同時に、正真 正銘のキリスト的な生き方をするに は、すべてに優越する神の愛に生活 を支配させなければならないとお教 えになりました。

キリストはご自分を取り巻く群衆が 奇跡に驚くだろうこと、また町中に その出来事を言い触らしに行くだろ うことをご存じです。しかし、主の 身ぶりにわざとらしさはありませ ん。ただあの婦人の苦しみに心を動 かされ、慰めを与えずにはおれない のです。事実、彼女の方に近づき、 「もう泣かなくともよい」┌डडと仰せ になります。それは、「涙にくれる お前は見たくない。私は喜びと平和 をこの世にもたらすために来たのだ から | と悟らせようとなさるかのよ うです。その後で、神としてのキリ ストの力が発揮され、奇跡が起こり ます。しかし、奇跡より先に、キリ ストの聖心は憐れみに震え、人とし

てキリストの有する聖心の優しさがはっきりと表れたのでした。

イエスから学ばなければ、本当に愛 することは決してできないでしょ う。ある人たちが考えるように、神 の愛に相応しい清い心を保つとは、 人間的な愛情に係わったり染まった りしないことだとすれば、他人の苦 しみに対して冷淡になって当然と言 えるでしょう。潤いもなく心のこも らない形だけの愛となり、情愛と人 間味ある温かさ、つまりキリストの 本当の愛徳は実行できないことで しょう。こう申し上げても、人々の 心を迷わせ、神から離れさせ、罪の 機会にそして滅びに導くような、 誤った考え方を認めるつもりは毛頭 ありません。

この世においては避けることができない苦しみ、時にはひどい苦悩から人々を救うための真の聖香油とは愛であって、そのほかの慰めはほんの

ひととき心を慰めるのに役立つとしても、その後で苦痛と絶望を心に残すだけであることが理解できる心、人々の悲しみに同情できる心をくださるよう、今日の祝日にあたって、主にお願いしなければなりません

繰り返し申し上げますが、人を助けたいのなら、理解と献身と愛情、愛情、をかりくだる意志をもって人すればなりません。そうすればないませんなが全律法を二つのたったが理解できるでしょう。とれたかが理解には一つ、を受け、心を尽くして、神と隣人を愛することなのですIII.

キリスト信者、実はあなたと私のことなのですが、キリスト信者は時として、この掟の実行を全く忘れているのではないかとお考えかもしれません。正義にもとる数多くの行いを避ける努力がなされていないとか、正されていないとか、あるいはま

た、根本的な解決策を講じないまま 世代から世代へと差別が伝わってい ると思うこともあるでしょう。

このような問題の具体的な解決策を 提案することは私にはできません し、またそうするつもりもありませ ん。しかし、キリストの司祭とし て、聖書の教えを思い出してくださ るように申し上げるのは私の務めで す。キリストご自身がお示しになる 審判の場面を黙想してください。 「それから、王は左側にいる人たち にも言う。『呪われた者ども、わた しから離れ去り、悪魔とその手下の ために用意してある永遠の火に入 れ。お前たちは、わたしが飢えてい たときに食べさせず、のどが渇いた ときに飲ませず、旅をしていたとき に宿を貸さず、裸のときに着せず、 病気のとき、牢にいたときに、訪ね てくれなかったからだ | | 1701。

困難や不正義を目にしても反応せ ず、それらを軽くする努力もしない ような人や社会というものは、聖心 の愛に従う人でもなく社会でもない と言えます。キリスト信者は種々の 解決策を自由に研究し、そして自由 に実行に移さなければなりません。 当然、多様性を尊重するよう要求さ れてはいますが、人類への奉仕とい う同一の目的に向かって一路邁進す べき点では一致していなければなり ません。そうでなければ、そのキリ スト教は神と人々に対する偽りと見 せかけにすぎず、イエスの言葉であ るとも、生命であるとも言えないで しょう。

(聖ホセマリア・エスクリバー『知 識の香』162、165-167)

[1] イエスの聖心のミサの祈り参照

- [2]  $\Box \neg 8.2$
- [3] マタイ25・21参照
- [4] 聖トマス・アクィナス『神学大全』I, q. 43, a. 5参照
- [5] ヨハネ19・34
- [6] ヨハネ19・30
- [7] フィリピ2・7
- [8] エゼキエル18・23
- [9] 聖ボナヴェントゥラ、Vitis mystica, 3, 11 (PL184, 643)
- [10] 聖アウグスティヌス『告白録』 1, 1, 1 (PL32, 661)
- [11] ーコリント11・24
- [12] エゼキエル36・26
- [13] エレミヤ29・11

- [14] ーコリント15・28
- [15] 使徒言行録10·38
- [16] ーヨハネ3・14
- [17] ルカ7・11-17参照
- [18] ルカ7・13
- [19] マタイ22・40参照
- [20] マタイ25・41-43

pdf | から自動的に生成されるドキュメント https://opusdei.org/ja-jp/article/sei-josemaria-sekkyo-iesu-no-mikokoro/(2025/11/27)